

創立130周年

維新の興奮醒めやらぬ頃、
東京・本郷にひとつの大学が誕生しました。
以来、その大学は、
先人の残した「知」を受け継ぎ、
新たな「知」を創り出しながら、
130年という年月を重ねてきました。

東京大学 — 未来へ。

一世紀以上の時を経ながらも、
私達のまなざしは常に
未来に向けられています。

教育

- ・KALS
(駒場アクティブ
ラーニングスタジオ)
- ・工学教育推進機構

研究

- ・人文知の現状と展望
- ・分野横断型研究組織

国際化

- ・柏国際キャンパス構想
- ・柏の葉国際キャンパス
タウン構想

多様化

- ・男女共同参画室
- ・バリアフリー支援室

快適化

- ・学生支援センター構想



未来へ

教育 未来へ
Komaba Active Learning Studio

KALS

理想の教育空間を求めて

現在の大学教育では早期専門分化の弊害が叫ばれています。
本学はこの問題に対処するために教養教育の充実に努めてきました。
ここに紹介するKALSもそのひとつ。
「教養学部を残す選択をした大学」として、
東京大学は新たな教養教育空間の創造に取り組んでいます。



永田 敬

大学院総合文化研究科 教授
教養学部附属教養教育開発機構担当

本年5月に駒場キャンパスに開設された「駒場アクティブラーニングスタジオ (KALS)」は、本学が掲げる〈理想の教養教育〉を目指して、新しい教育を実践するために造られた空間である。板書とノートによる従来の聴講型の教室に対し、KALSは、データ・情報・映像などの様々なインプットに対して、読解・ライティング・討論を通じて分析・統合・評価を行い、その成果を総合的にアウトプットする能動的な学習活動、すなわち「アクティブラーニング」を支援するための教室空間である。同時に、KALSで行われる授業では、“その場 (in situ)”での協調学習を採り入れることによって、学生全員が授業に能動的に関与することが求められる。

KALSの最大の特徴は、最先端の情報コミュニケーション技術 (ICT) を活用して、アクティブラーニングの効果を最大限に引き出す設計がなされている点である。140㎡のスタジオと70㎡のウェイトングルームで構成された教室には、授業スタイルに合わせて自由に組み替え可能な机が配置され、4面の壁に設置したプロジェクタを用いて、教室のどの位置からでも講義資料や学習者の作業内容を全員で共有できる。学生一人ひとりに無線LANを装備した40台のタブレットPC

を配備し、データ検索・映像視聴・シミュレーション・ライティング・マインドマップ作成などの学習作業を支援している。このような「ICTを活用したアクティブラーニング」によって、学生自らが、複雑な情報を整理して課題を見つけ出し、その解決を目指して様々な視点から課題に取り組むことにより、広い視野から諸問題に対応できる人材の育成を目指している。夏学期に開講した授業科目「Critical Writing Program」では、KALSのICT環境を活用したリアルタイムな相互批評によって、英語による論理的な作文能力の向上に効果を上げた。今後、NHKアーカイブスの豊富な映像資料を利用した「現代社会論」や、蛋白データや分子動力学シミュレータ等の先端研究の成果を採り入れた「生命科学アクティブラーニング」などの授業を計画している。KALSは教養学部・大学総合教育研究センター・情報学環の共同による教育プロジェクトであり、本学が社会に提示する〈理想の教養教育〉のひとつのモデルである。そして、駒場キャンパスに建設を構想している「理想の教育棟」への第一歩でもある。



4面ワイヤレスプロジェクタ

前後左右の四方にワイヤレスプロジェクタを設置してあるため、それぞれ別の画像の投影が可能。さらにスクリーンを4分割し、最大16台のタブレットPCの状況を一覧できる。多方向から豊富な情報が立ち現れる刺激的な空間



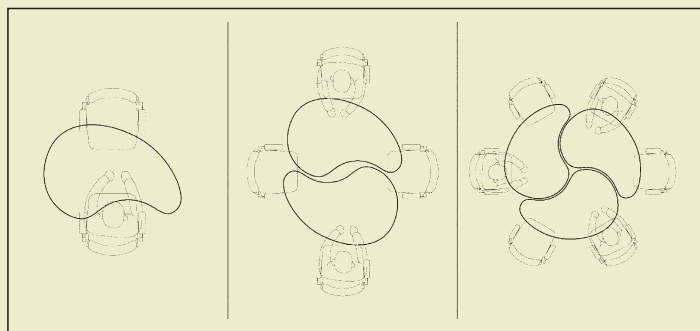
瞬間調光ガラス

KALSに隣接する形でウェイトングスペースが設置されているが、その間を隔てるガラスの壁はスイッチひとつで透明・不透明の選択ができる。学生の集中力を削ぐことなく、ゲストは余すところなく講義を見学することができる



タブレットPC

KALSでは各学生にタブレットPCが与えられ、教育ソフトウェアを駆使した講義が行なわれる。40台のLenovo社製ThinkPad X60 Tabletはキャスター付きワゴンに収められており、必要な台数をスタジオに引き出して使用する



まがたまテーブル

独特なフォルムのこのテーブルは、組み合わせることによって2人用から6人用まで自在に変化する。最適な人数のグループワークを支援するばかりでなく、キャスターによる自由な移動によって、アクティブな空間をも演出する



電子黒板

前面の大型スクリーンはインタラクティブガラスボードになっている。教師は指示棒を使ってこのガラスボード上から直接、教師用PCを操作。機能的な講義が展開する。もちろん、通常のホワイトボードとしての使用も可能



パーソナルレスポンスシステム

あらかじめパワーポイントにより作られた問題と選択肢を学生がキーパッドで解答。結果をリアルタイムでグラフ表示する。グループワークやディスカッションのきっかけ作り、学習状況の評価など、利用の幅は無限に広がっていく

教育 未来へ
工学教育推進機構

進化する工学専門教育の姿

学生たちは専門課程において、初めて「分野学問の魅力」を体感します。
そして、その中でも、強烈に魅力を体感した学生は、研究者への道を歩み始めます。
専門教育に携わる教員は皆、その魅力を余すところなく伝えるために、
常に多角的な視点から教育スタイルの進化をうながしているのです。



影山和郎

大学院工学系研究科 教授
同研究科附属工学教育推進機構長

いまでこそ、ほとんどの総合大学には工学部が設置され、工学系の単科大学も数多くあることから、工学はとてもポピュラーな学問領域だと思われがちであるが、現在のような工学教育が始まったのは我が国が最初であり、工部大学校を一つの源流とする工学部の教育組織は、その設立当時には西欧にも例のない日本独自の極めてユニークなものであった。工学部・工学系研究科はその創設当時から、時代や社会の要請に応える人材を育成してきた。また書物（理論）と体験（実践）の両方のバランスを重視した教育方針は、130年を越える工学部の歴史の中で脈々と継承されてきた。

工学教育推進機構の目的は、学生に工学の魅力を伝えるとともに、時代や社会の要請に応える教育及び理論と実践を重視した教育を、現代の高度化した科学技術社会の中で実現することにある。そのために、工学知高度化教育と国際連携教育の2つを事業の柱として活動している。

工学知高度化教育においては、工学の多様性に対応した学生のセルフ・オリエンテーションを支援するため、カリキュラムの体系化、MIMA エンジン、MIMA サーチを開発し、工学教育を構造化・可視化しシラバスを体系化した。また工学系研究科共通科目としての工学倫理講演会や先端技術特別講義の他、教養学部



ものづくり実験工房

教養学部前期課程「全学体験ゼミナール」「全学自由研究ゼミナール」の講義および実験・演習で用いられる工房。「ものづくり」を体験するための貴重な場

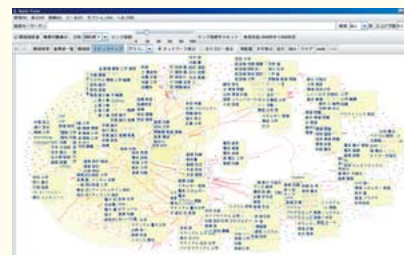


ビデオ・アーカイブ室

ビデオアーカイブ室では、工学系でのエネルギー、情報などの共通講義、倫理講演会などの講義・講演類のビデオ記録を、諸権利の制約のない環境で、学生、教職員が自由に視聴できる。今後さらに、専門分野、課題ごとに、新しいビデオを提供していく予定

前期課程の全学自由研究・体験ゼミナールにおける「ものづくり実験教育」のための環境整備を行ない、これを導入部とする創造性工学教育の実現へとつなげる教育法の検討を行っている。

国際連携教育においては、英語による論文作成能力とプレゼンテーション・スキルを身につけるため、大学院生を対象とした「科学技術英語A・B」を開講し、また「スペシャル・イングリッシュ・レッスン」は、学部学生の英語コミュニケ



MIMA エンジン・MIMA サーチ

カリキュラムの連関性を詳細に示すMIMA サーチのディスプレイ画面。学びたいテーマに沿った「講義の組み合わせ」を可視化する



工学部スペシャル・イングリッシュ・レッスン

外部の複数の英語学校を誘致して行なわれている実戦的英会話講座とTOEFL講座。国際会議での発表・討論に対応するコミュニケーション能力を養成

ーション能力向上に貢献している。

工学教育推進機構は以上のような活動を通して、工学という学問領域の内容と、そのリアルな魅力を学生に伝えていきたいと考えている。



教育・研究 未来へ
人文知の現状と展望

受け継がれる「知」。創り出される「知」。

一般社会、特に産業界から「実学」に熱い眼差しが注がれる現在、

再び「人文知」の重要性が指摘され始めています。

本学は有史以来、永々と積み上げられてきた人類の「知」に立脚した
「新たな人文社会系諸学の可能性」を模索し続けています。



立花政夫

大学院人文社会系研究科長・
文学部長

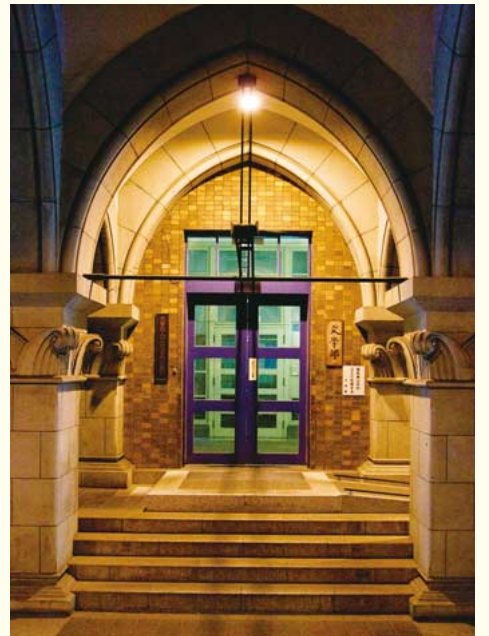
人文社会系研究科・文学部では、人間活動にとって基礎をなす人文知の体系化と継承的発展に積極的に取り組んでいる。大学院重点化に際し、人文科学研究科と社会科学研究科が再編されて5専攻（基礎文化研究・日本文化研究・アジア文化研究・欧米系文化研究・社会文化研究）からなる人文社会系研究科が発足した。その後、独立専攻の「韓国朝鮮文化」と「文化資源学」が創設され、2005年には新しい人文学の構築をめざす「次世代人文学開発センター」が、2007年には世界の文学を扱う「現代文芸論」専門分野・専修課程が設置された。伝統的な授業の他に、文理融合の理念に基づく「応用倫理」「文化環境学」「死生学」、英仏独中の「アカデミック・ライティング」、「原典を読む」といった授業が全学にむけて開講されている。

本研究科では、巨視的な視野のもとで長期的・継続的な研究活動を行うことによってはじめて可能となるような包括的・体系的的研究をしているため、ファッション性の高い論文を多数書くというよりは、大部で重厚な書物を著述する教員が多い。企業等との連携で目に見えるような成果を挙げるというよりは、専門書以外に一般書・啓蒙書・解説書等を出版したり、公開講座やシンポジウムを開催したりして、一般社会の期待に応じてい

る。

21世紀COEプログラム「生命の文化・価値をめぐる『死生学』の構築」は、古今東西の死生観を比較研究し、死生の価値についての理論的研究を踏まえつつ、現代の死生の臨床現場に生起する諸問題に応えようとするものであり、医学や医療等の専門家との共同で推進された。その成果を発展させるべく、2007年4月に寄付講座の上廣死生学講座を設置し、2007年度からグローバルCOEプログラム「死生学の展開と組織化」が始まった。また、膨大な時間と労力を要す一方で研究者個人の成果にはならないという基礎

文献の整備に果敢にも取り組んだ教員もおり、諸学会や支援団体の協力を得、十数年の歳月をかけて2007年には「大正新脩大蔵経テキストデータベース」を完成させた。人文学諸分野における学术交流を促進・強化し、東アジアにおける新たな人文学の可能性を切り開くことを目的とした「PESETO（北京大学・ソウル大・東京大学）人文学会議」も立ち上げられた。本研究科は、今後も、学問の体系化と既存のディシプリンの継承的発展を目指すと共に、先端的・学際的な学問領域を創成するために、さらなる努力を続けていきたい。



研究 未来へ 分野横断型研究組織 融合、統合、 構造化 — 新たな 学問の誕生

「巨大化・複雑化した人類世界の
諸問題の解決」を期待される

学術の場においては、

既存の学問分野の「壁」が多くの真摯な
研究者の眼前に立ち現れます。

この「分野の壁」を取り壊し、

学際・学融合の流れに沿うべく

設立されたのが、

様々な分野横断型研究組織です。

「知」の進化をうながすために……

新たな挑戦が始まっています。



岡村定矩

理事・副学長
総長室総括委員会委員長
総括プロジェクト機構長

東大の分野横断型研究を 支える仕組み

東京大学における教育研究は従来、部局と呼ばれる組織を中心として行われてきました。部局とは、主として研究領域ごとに設置された、大学院研究科、学部、附置研究所、全学センターなどを指す本学特有の呼称です。近年の学問の急速な発展に対応するためには、部局中心の組織運営形態に収まりきれない教育研究も必要となってきました。

具体的に言えば、研究の専門化と細分化で見えにくくなった学問の全体像の提示、少子高齢化社会、エネルギー問題、地球温暖化など人類が初めて直面した世界規模での問題の解決、基礎研究とその多種多様な分野への応用との有機的連携、などなど部局を越えて本学の研究者の叡智を結集する必要がある課題が多数顕在化してきました。

このような、分野横断的な教育研究を

東京大学の分野横断型研究（教育）組織

総長室総括委員会	
<p>生命科学教育支援ネットワーク（ネットワーク長 福田 裕穂） 東京大学の生命科学に関する教育を支援し、その発展に寄与することを目的としたネットワーク組織。</p>	<p>総括プロジェクト機構 （機構長 岡村 定矩） 全学として推進すべき研究プロジェクトについて、寄付研究部門または研究部門を設け、総括することを目的とした研究組織。</p>
<p>生命科学研究ネットワーク（ネットワーク長 松本 洋一郎） 学内における生命科学研究者のコミュニケーションの促進、及び生命科学の研究組織に関する課題の解決策の検討、その他生命科学研究者に共通する話題についての議論を行い、もって東京大学の生命科学研究の発展に寄与することを目的としたネットワーク組織。</p>	
<p>サステイナビリティ学連携研究機構（IR3S）（機構長 小宮山 宏） サステイナビリティ学に関する国内外の大学・研究機関間の連携拠点の役割を果たすとともに、関連する研究及び教育を推進し、その発展に寄与することを目的とした研究組織。</p>	<p>寄付研究部門</p> <ul style="list-style-type: none"> ・JR 東日本安心安全工学 総括寄付講座 ・ジェロントロジー ・高速鉄道におけるブロードバンド通信（JR 東海） ・知的資産経営総括寄付講座
<p>地球観測データ統合連携研究機構（EDITORIA）（機構長 小池 俊雄） 地球観測データ統合に関する研究及び教育を推進し、国内外の大学・研究機関との連携拠点の役割を果たすとともに、その発展に寄与することを目的とした研究組織。</p>	<p>研究部門</p> <ul style="list-style-type: none"> ・領域創成プロジェクト ・学術統合化プロジェクト
<p>放射光連携研究機構（機構長 尾嶋 正治） 世界最高の高輝度放射光を用いて生命科学、物質科学についての最先端科学を展開し、卓越した研究成果を出し続けて世界をリードし、関連する研究及び教育を推進し、その発展に寄与することを目的とした研究組織。</p>	<p>学内研究連携ユニット</p> <ul style="list-style-type: none"> ・現代ヨーロッパ経済史（CHEESE）研究連携ユニット ・健康・発達支援メカトロニクス研究連携ユニット ・先端地球物質科学研究連携ユニット
<p>生物機能制御化合物ライブラリー機構（機構長 長野 哲雄） 生物機能を制御する合成小分子化合物に関する研究を推進するとともに、国内外の大学・研究機関との連携拠点の役割を果たすことにより、その発展に寄与することを目的とした研究組織。</p>	
<p>ナノ量子情報エレクトロニクス研究機構（機構長 荒川 泰彦） ナノ技術、量子科学及びITハードウェアの先端融合領域におけるイノベーションの創出のための研究・教育を推進するとともに、国内外の大学・研究機関・企業との連携拠点の役割を果たすことにより、その発展に寄与することを目的とした研究組織。</p>	
<p>知の構造化センター（ネットワーク）（ネットワーク長 松本 洋一郎） 自律分散的に創造される知識を構造化することにより、知的価値、経済的価値、社会的価値、文化的価値に結びつけるための方法論を構築し、成果を実装することを目的としたネットワーク。</p>	
<p>海洋アライアンス（機構長 浦 環） 海に関わる教育研究の部局横断的なネットワーク組織。次世代を担う総合的人材の育成に取り組みとともに、海に関わる現代的課題の発掘と、その解決のためのシンクタンクの役割を果たし、もって海洋関連分野における教育研究の国際的な核を形成することを目的としている。</p>	
<p>エネルギー関連研究ネットワーク（ネットワーク長 西尾 茂文） エネルギーに関わる教育研究の部局横断的なネットワーク組織。次世代を担う総合的人材の育成に取り組みを視野に入れ、エネルギーに関わる現代的課題の発掘と、その解決のためのシンクタンクの役割を果たし、もってエネルギー関連分野における教育研究の国際的な核の形成に資することを目的としている。</p>	
<p>トランスレーショナル・リサーチ・イニシアティブ（機構長 平尾 公彦） 学内におけるトランスレーショナル・リサーチに関わる研究者のコミュニケーションの促進と諸課題に関する検討、及び基礎研究の成果に基づく橋渡し研究や臨床研究を促進し、その成果を医療の現場に還元することにより、わが国のトランスレーショナル・リサーチ促進に寄与することを目的とした研究組織。</p>	
<p>数物連携宇宙研究機構（機構長 村山 斉） 世界トップレベル国際研究拠点形成促進プログラムに選定され発足。現代基礎科学の最重要課題である暗黒エネルギー、暗黒物質、統一理論（超弦理論や量子重力）等の研究を数学、物理学、天文学の連携により進め、宇宙の起源と進化の解明を目指す融合型研究拠点。</p>	

支える仕組みが、総長室総括委員会とそ
のもとに置かれた機構等の組織です。組
織図に示されているように、2007年10
月現在、13の機構等が活動を行っていま
す。このうち、総括プロジェクト機構は、
小宮山宏総長の強いリーダーシップによ
って設置されたものです。この中では、
学術統合化プロジェクト（ヒト・地球）、
領域創成プロジェクトに加えて、寄付研
究部門によりさまざまな教育研究活動が
展開されています。

総括プロジェクト機構に2007年7月に、
「学内研究連携ユニット」という仕組み
が新たに誕生しました。本学には4000人

を越える研究者がいます。部局を越えた
教育研究プロジェクトのアイデアがあっ
たとしても、特に文系のように少人数で
研究が行われる分野では、「同学の志」
を見つけるのは容易ではありません。学
内研究連携ユニットは、その手助けをし
て、アイデアを教育研究プロジェクトへ
と発展させてゆくいわば孵卵器の役目を
する仕組みです。

10月1日に発足した数物連携宇宙研究
機構は、世界トップレベル国際研究拠点
として文部科学省に採択されたものです。
このように、さまざまな仕組みが東京大
学の分野横断型研究を支えているのです。



「知」を創出し、活用するために 知の構造化センター



美馬秀樹

大学院工学系研究科
特任准教授

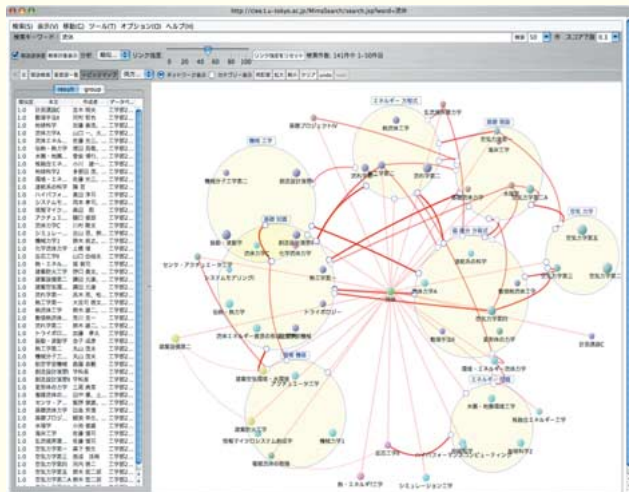
1,600万件と3万件……これらはそれぞれ、MEDLINE（医学・生命科学分野の文献データベース）に登録されている文献数、及び毎月のおおよその増加数（2006年時）である。ICT（情報通信技術）の発展、科学の拡大、専門分野の深化を背景に、生命科学分野のみならず、あらゆる分野において知識の量が爆発的に増加しており、非専門家はもとより専門家にとっても知識の全体像の把握が非常に困難な状況となっている。さらには、環境、エネルギーのような、地球規模での複雑で多様な問題が顕現化し、学際的、分野横断的に知識の活用を促す仕組みの構築がより重要性を増している。

このような問題に対し、東京大学では、知識や領域間、また、知識と人との「インターフェーシング」を行い、「知を構造化」することで、知的価値、経済的価値、社会的価値、文化的価値に結びつけるための方法論を構築し、成果を速やかに実装することを目的に、全学プロジェクトとして、知の構造化センター

（ネットワーク）を設立した。当センターでは、学術知識、ものづくり、企業経営、社会問題、メディア、文化・芸術等の様々な知識を収集、構造化することで、新たな知識を創出し、学術創成、経営、政策の支援等、分野を超えた知の活用を可能とする革新的技術を開発する。これにより、知の創造、分析、検索、活用からさらに高次の知の創造へと昇華する「知の螺旋の形成」を行う。高度な自然言語処理はもとより、次代の知識理解技術、情報通信技術の研究開発がその技術基盤となる。

先に開催されたセンター設立記念ワークショップでは、内外より200名以上という多数の参加者があり、参加者アンケートの集計結果と併せて、「知の構造化」及び当センターへの期待の高さがうかがえた。

今後、Wiki技術とMIMAサーチの融合によるリアルタイム動的構造化知識基盤の実現を始め、「進化する教科書」、「百学連関知識ベース」等、東京大学でしか実現し得ない“最先端構造化技術とハイクオリティな知識ソースの融合したネットワーク型知識基盤”、まさしく「知の構造化ネットワーク」の現実化（リアル化）を目指す。



MIMA サーチによる講義間の「インターフェーシング」：関連する講義やその重要概念が瞬時に把握でき、履修科目選択が効率的に行える。

ジェロントロジー寄付研究部門 安心で活力ある長寿社会の実現をめざして



秋山弘子

ジェロントロジー
寄付研究部門 教授

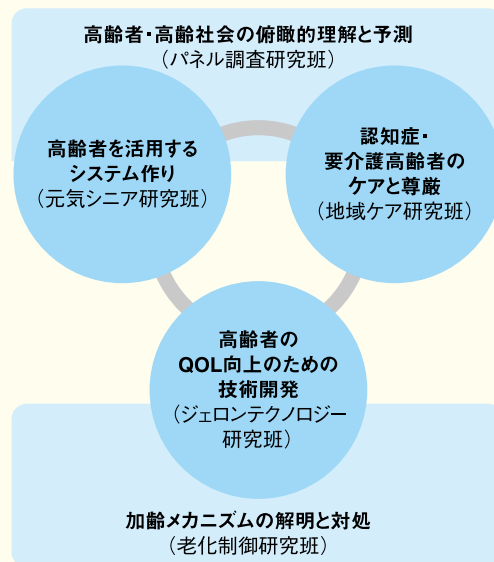
長寿先進国であるがゆえに他国に先駆けて顕在化している高齢社会の諸問題に、いかに対処するかが国の最重要課題の一つであり世界中が注目している。高齢社会の問題は多岐にわたる。労働に従事しない依存人口比率の上昇や認知症・虚弱高齢者の介護など深刻な問題が顕在化している一方、高齢者を社会資源と捉え新しい雇用や産業の誕生への期待も大きい。これらの課題は種々の要因が相互に関連しあっており、従来のような縦割りの学問領域を超えた高度の知識・技能・経験が必要と

なる。

ジェロントロジーとは、そうした高齢者や高齢社会全般に関わる諸課題を研究対象とする学際的学問である。総長室直轄の総括プロジェクト機構に属するジェロントロジー寄付研究部門は、全学の知を結集して安心で活力ある長寿社会、長生きを喜べる社会の実現に資する研究・教育の国際的拠点の形成をめざしている。老化のメカニズム、高齢者の生活変化、元気シニアの活用策、地域医療介護、工学的デバイスによる生活の質の向上、などの研究に平行し、毎月のセミナーを開催、2008年4月からは高齢社会を支える人材を養成するために分野横断的なジェロントロジー教育プログラムを開発予定である。

ジェロントロジー教育研究の国際的拠点

研究体制



研究インフラ整備

- ・ジェロントロジーライブラリー
- ・サブジェクト（被験者・調査対象者）プール
- ・データ解析相談サービス
- ・テクノロジー相談サービス

人材育成プログラム

研究者育成プログラム

1. 分野横断型教育プログラム
2. 学際的研究指導
3. 若手研究支援事業
4. 国際活動支援事業

キャリア形成支援

- ・産官民団体との共同研究、ワークショップ
- ・インターンシップ
- ・コミュニケーショントレーニング

国際化 未来へ 柏国際キャンパス構想& 柏の葉国際キャンパスタウン構想

街をキャンパスに変える。 キャンパスを世界に変える。

東京大学三極構造のひとつ、柏キャンパスでは現在、着々と新たな試みが始まっています。「柏の葉」の街全体をキャンパスに作り変え、そのキャンパスに国際的な「世界」を作り上げるという試み……まったく新しい大学モデルの出現は、もう、すぐそこまで来ています。



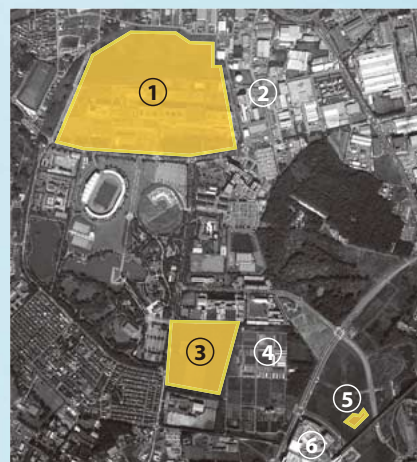
磯部雅彦

大学院新領域創成科学研究科 教授
総長特任補佐(参与)

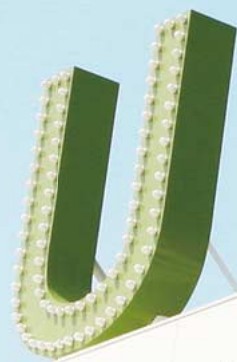
柏国際キャンパス構想の現状と 近い将来

本学が学問の新たな発展を目指して柏に新キャンパスを展開するという議論は20年余前に始まりましたが、12年前の1995年にはキャンパス用地の一部が取得され、計画の実現に向けて大きな一歩を踏み出しました。1999年度から柏キャンパスへの移転が始まり、新領域創成科学研究科、宇宙線研究所、物性研究所と4つの研究センター（人工物工学研究センター、空間情報科学研究センター、高温プラズマ研究センター、気候システム研究センター）を合わせて7部局が昨年までに移転を完了しました。海洋研究所も2年余り先に中野から移転するように建物の準備を進めており、また生産技術研究所千葉実験所の機能も移転することになっています。これらにより柏キャンパスは、多くの全国規模での共同利用施設を擁し、大学院研究科と研究所・研究センターを中心として様々な学問分野をカバーする、より研究に重心を置いたキャンパスになろうとしています。柏キャンパス設立の理念である学融合、すなわち様々な既存の学問分野を融合して新たな学問を創り出すという目的を実現し、教育研究活動を活発化するための大きな目標が、アクションプランに掲げられた柏国際キャンパス構想です。この実現のために、まず柏、柏Ⅱ、駅前の3か所か

らなるキャンパスの土地取得を完了することになっており、最終的に本郷や駒場に匹敵する広さになります。そして、そこに世界をリードする研究施設を整備するための具体的検討を進めており、国内外からの研究者や留学生を集めて教育研究を発展させる計画です。すでに、サステイナビリティ教育プログラムが始まり、世界トップレベル研究拠点プログラムに「数物連携宇宙研究機構」が採択されました。これらを支えるために、外国人研究者や留学生がいつでも滞在できるように、インターナショナル・ロッジの建設計画を来年度末の完成を目指して進めたり、柏インターナショナル・オフィスを開設し、外国人の来日準備から帰国後までワン・ストップ・サービスができるようにする試みも行っています。柏キャンパスは本郷、駒場と合わせた本学の3極構造の新たな一極となろうとしています。さらに、それだけでなく、他大学、自治体、産業界、地域とも協力し、支援を得ながら、柏の葉キャンパス駅の周辺地域がキャンパスを中心とする街として発展するように努力しています。進化する柏キャンパスに是非ご注目下さい。



1. 東京大学柏キャンパス
2. 東葛テクノプラザ・東大柏ベンチャープラザ
3. 東京大学柏Ⅲキャンパス
4. 千葉大学環境健康フィールド科学センター
5. 東京大学柏の葉駅前キャンパス（予定）
6. 柏の葉キャンパス駅



Urban Design Center



北沢 猛

大学院新領域創成科学研究科 教授
柏の葉アーバンデザインセンター長

柏の葉国際キャンパスタウン構想

国際キャンパスタウン構想は、東京大学と千葉県、柏市、千葉大学の共同研究により描こうとしている柏キャンパス周辺の将来像です。対象地域は13km²で、大学や研究機関、公共施設、工業団地が立地し、新興住宅地と古くからの農村集落が混在しています。2005年秋、つくばエクスプレスが開通して秋葉原から30分と立地条件が格段に向上し、沿線開発も本格化しました。おおたかの森、江戸川、利根川、豊かな自然環境が残っています。こうした学術と産業、生活と文化、自然という資源を活用しさらなる相乗効果を構想しています。これまでの学術都市は国の主導などでしたが、柏の葉は構想から市民や企業、自治体、大学の「公民学」連携で進めている点に特徴があります。

まちづくりの理念として(1)自然と共生する環境都市、(2)産業や活動を生む創造都市、(3)国際的な学術都市、(4)多様な交通の総合管理、(5)コミュニテイ

形成、(6)先進のアーバンデザイン(7)エリアマネジメント(8)社会実験都市を提案しています。2006年の基礎調査と東京大学や他機関の研究や実証実験の成果をもとに、基本方針と目標、戦略プロジェクトを研究していますが、可能なものは順次具体化しています。また、構想について広く情報や意見を交換する場として東京大学の提案により「柏の葉アーバンデザインセンターUDCK」が設置され、自治体と開発者、鉄道会社、柏商工会議所、企業、研究者や芸術家、デザイナー、そして市民が参加しています。地域と東京大学の関わりは研究だけではなく、環境デザイン統合教育プログラム「都市環境デザインスタジオ」は、柏の葉を課題にまちづくりを提案するもので、当構想の学生版とも言えます。テーマは『新しい公共空間』でしたが、その成果を公開したところ、幾つかは実現にむけて関係機関のプロジェクト研究会が始まっていま

す。また、柏市とUDCKが共催する地域リーダー育成の「まちづくりスクール」は多くの教員や学生が支援をしています。

これまで大学と社会の関係は研究者がそれぞれに地域や国、企業と構築する個別提携でしたが、柏の葉国際キャンパスタウン構想では、計画関連の専門領域に限らず広い知のネットワーク連携が構築できるのではないかと考えています。関心のある研究者の参加を呼びかけています。柏は、城下町や宿場町という歴史都市ではありませんが、高度成長期の郊外都市、豊かな自然が残る田園都市と多様な顔を持っています。課題も多様ですが、可能性や進取の気風に富む都市です。そこに、国際的な研究や学術、市民や企業の新しい活動が創造される期待があり、大学の知が大きな役割を果たすと思いま



すでに動き始めた「柏の葉国際キャンパスタウン構想」具体例



写真転載：VELO TAXI Japan HP より

柏の葉ペロタクシー

つくばエクスプレス柏の葉キャンパス駅を中心とした柏の葉国際キャンパスタウン・エリアで、新しい交通手段『ペロタクシー』の実験走行を今年10月から予定しています。VELO（ペロ）はラテン語で自転車を意味します。1997年にドイツの首都ベルリンで、「人と環境にやさしい交通手段」として開発された屋根付き三輪自転車タクシーです。鉄道やバスなど公共交通を補完する交通手段としてだけでなく、環境問題・高齢化社会問題・地域経済の活性化などの解決策の一つでもあると言われています。柏の葉公園内や千葉大学構内、本学柏キャンパス構内も走行実験ルートと設定されています。



柏の葉アーバンデザインセンターの外観

柏の葉アーバンデザインセンター(UDCK)

新しい時代に対応する都市、環境と生活のあり方を模索するために『柏の葉アーバンデザインセンター（通称:UDCK）』が創設（2006年11月）されました。柏の葉をフィールドとしてまちづくりを議論し、さらに実証実験を支援する場として機能しています。本学大学院新領域創成科学研究科北沢猛教授がセンター長を務め、運営委員会は東京大学、千葉大学、柏市、田中地域ふるさと協議会、柏商工会議所、首都圏新都市鉄道、三井不動産株式会社により構成されています。まちづくりリーダーを育成するための「UDCKまちづくりスクール」、東京大学「都市環境デザインスタジオ」、地元企業の方や地域住民、専門家等が憩う「Kサロン」などが行われています。

<http://www.udck.jp/>



十坪ジムの様子

十坪ジム

「十坪ジム」とは、東京大学大学院新領域創成科学研究科附属生涯スポーツ健康科学研究センターと柏市が共同で始めた事業のひとつであり、十坪ほどのスペースにマシンを設置して、健康づくりを目的としたトレーニングをするジムです。本学小林寛道名誉教授が開発した「認知動作型トレーニングマシン」は、ゆっくりとした動作で筋肉と脳に刺激を与え、高齢者でも無理なく運動できます。2006年10月からスタートした十坪ジムは、2007年5月の時点で7ヶ所に開設されており、第2段階としては拠点ジムを補完する20箇所を設置します。最終的には、市内40箇所に設置する予定です。



柏の葉キャンパスエリアの模型（UDCKにて常時展示）

ASNET 「日本・アジアに関する教育研究ネットワーク」の推進

たくさんの研究室がそれぞれで日本やアジアとかかわる活動をしています。お互いに協力すれば、たとえば理系と文系で補いあえば、もっとすごいことができるはず。そう考えた有志によるボランティアな活動として2001年にASNET (Asian Studies Network: 日本名「日本・アジアに関する教育研究ネットワーク」) は発足しました。どの部局に、どういう研究をしている人がいるかをみつけた

めのデータベースを作りました。また、情報を共有できるメーリングリストを作り、これは週刊のメールマガジンへ発展しました。2005年からは本部の進める事業となり (ASNET推進室の設立)、これを機に教育活動「日本・アジア学講座」(大学院生対象) をはじめました。所属も専門も異なる先生達が共通のテーマ (「アジアにおけるリスクと国際協力」など) で講義するリレー式科目を中心に10科

目を行っています。また、今年には国際シンポジウム「アジアと語る希望・幸福」を開催します。希望・幸福をテーマにしてアジア各地の知と日本の経験を結びつけたいと思います。

ASNETはたくさんの人に支えられたバーチャルなネットワークです。それを活かして、アジアに位置する日本・東京大学特有の学際・国際化を担っていきたいと思います。



詳しい活動はホームページで。(メルマガ購読もできます)
<http://www.asnet.dir.u-tokyo.ac.jp>



柏の葉駅周辺の電柱に設置された見守りカメラ

自立的移動支援プログラム

本学が中心となって設立された「特定非営利活動法人 柏の葉キャンパスシティITコンソーシアム (KACITEC)」は、産学官の有機的な連携の下、ITの活用による次世代の生活・産業支援システムの研究・開発・実用化を目指し、柏の葉キャンパス駅周辺において様々な実証実験を重ねています。その一つに、本学大学院新領域創成科学研究科近山隆教授により研究されている自立的移動支援プログラムがあります。5つのサブプロジェクトから構成され、ユニバーサルデザインが確保された安心安全なまちづくりを目指すものです。多数カメラの追跡によるセキュリティシステムにより、犯罪を抑制し移動時の安全が24時間確保されたまちづくりを目指しています。



オンデマンドバス実験の様子

オンデマンドバス・システム

オンデマンドバスとは、乗客がWebや携帯電話により、到着時間および乗車場所を指定し、予約できる乗り合い型バスです。予約の可否は即座に利用者に通知されます。本学大学院新領域創成科学研究科大和裕幸教授は柏市と雲仙市での実証実験を行い、実用化への見通しを得ました。2007年は、GPS搭載型携帯電話を介して、乗客とのコミュニケーションを充実することによって、さらに個別のニーズに的確に対応するシステムを検討します。バス停を固定する必要が無く、音声認識により予約できるので、高齢者・身障者にも便利なシステムです。



柏の葉駅周辺で開催されたTX サイクルフェスタ

レンタルサイクルシステム

柏の葉キャンパス駅周辺では、自転車によるまちづくりが進められています。2007年5月19日にはTXサイクルフェスタの一環として、本学大学院工学系研究科羽藤英二准教授により自転車とまちづくりに関するワークショップが行われました。市民、学生、行政、研究者、さらには高校生も参加して、自転車まちづくりのために必要な施設、走りやすい道路や気持ちのいい環境について様々なアイデアを生み出しました。柏の葉サイクルマップの作成や共同自転車システムの導入に向けた具体的な検討を進めています。

具体例説明文/UDCKディレクター 丹羽由佳理



柏の葉サイクリング Style (都市環境デザインスタジオにおける学生の提案)

東京大学の学生スポーツ国際交流

本学の課外体育活動において、中心的役割を果たしている東京大学運動会では、本学創立130周年記念事業の一環として、「東京大学創立130周年記念国際交流スポーツ大会」を企画しています。

漕艇部では、9月23日、埼玉県戸田市戸田公園において、ブリティッシュコロンビア大(カナダ)・ソウル大(韓国)・京大との4大学対校レガッタを開催しました。また、硬式野球

部・ハンドボール部・剣道部においても、それぞれソウル大学生を招聘し、対校戦を行います(7月~12月中、学内各所)。さらに、9月21日には薬学系総合研究棟において、本学招請大学学生と本学学生とのパネルディスカッションを中心とした文化交流プログラムも行なわれました。これらの企画により、スポーツ技術の研鑽及び学生間の国際交流の促進を図っています。

これからも上記運動部含めいくつかの運動部ではそれぞれ国際交流試合・海外遠征を立案・継続していく方向です。また近年外国人留学生の中で運動部に入部する学生が増加していることもあり、今後の課外体育活動も国際色を帯び、より活動に広がりを持つことになるでしょう。



4大学対校レガッタ・130周年記念親善レースでは、ブリティッシュコロンビア大学がトップでゴールし、本学は京都大学と熾烈な2位争いを演じたものの惜しくも3位となった



活発な議論も交わされた文化交流プログラム

多様化 未来へ
男女共同参画室

東大が描き出す 女性研究者の近未来



村嶋幸代

大学院医学系研究科 教授
男女共同参画室長

東大男女共同参画室とは？

平成18年4月に創設された総長直轄の室です。「女性研究者の研究継続の保障」と「女性研究者の裾野の拡大」を重点に、教職員と事務部門とが協働しながら3つの部会で進めています。即ち、女子学生の進学を拡大しようという「進学促進部会」、妊娠・育児等の期間を働きやすくする「勤務態様部会」、保育園や休憩室・街灯等を整備して働きやすい大学にする「環境整備部会」です。

平成18年度は東京大学男女共同参画基本計画(平成15年12月決定)をバージョンアップする「推進計画」を策定しました。

平成19年度には、科学技術振興調整費「女性研究者支援モデル育成」に東大モデルが採択されました。

東大モデル「キャリア確立の10年」支援プランについて

「キャリア確立の10年」は、ちょうど、博士課程から教員になっていく時期をさします。この時期は研究者としての自己の確立を図ると同時に、妊娠・出産・育児等のライフイベントが重なりやすい時期でも有ります。

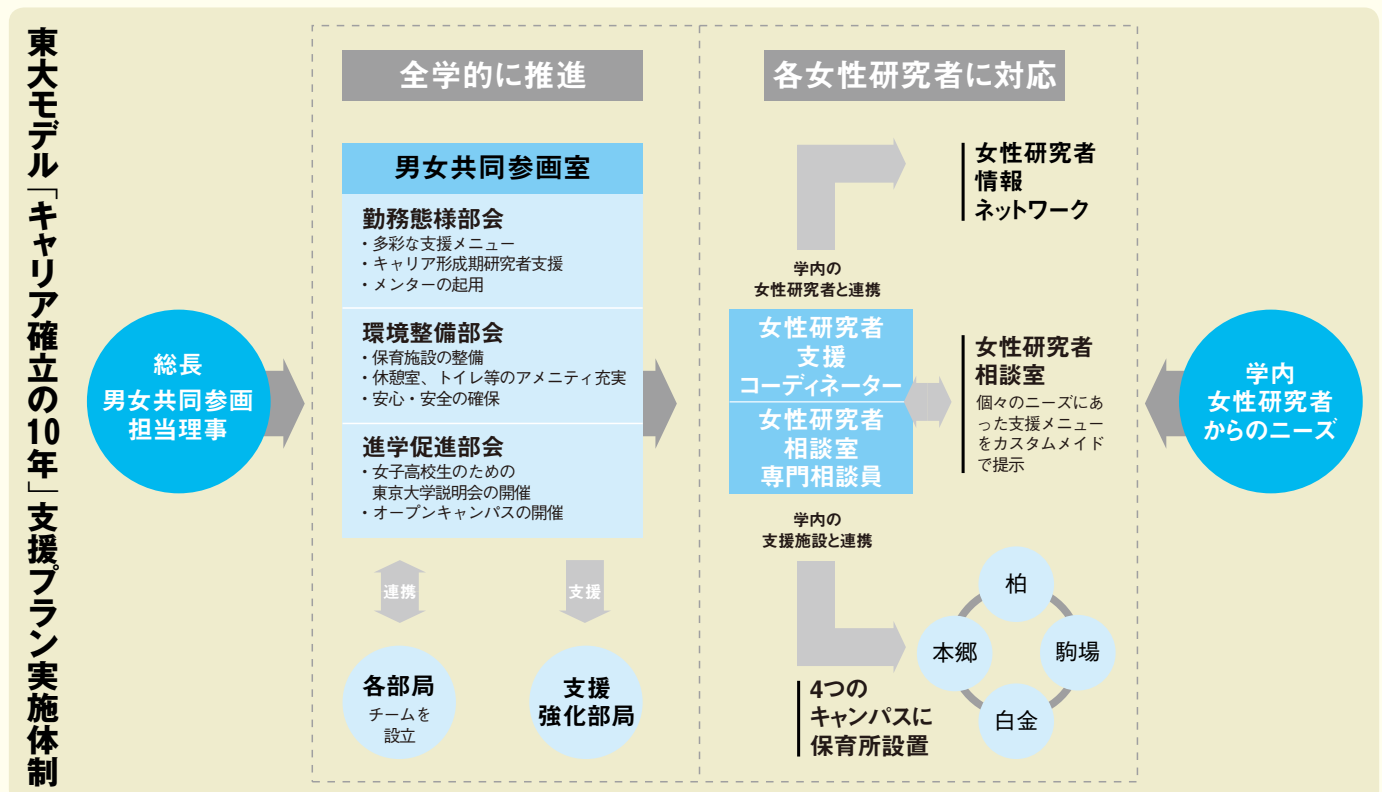
この時期の支援を重点に、振興調整費で、女性研究者支援コーディネーターと女性研究者相談室専門相談員を専任教員として採用しました。前者は、各部局との調整をしながら、このプランを推進します。後者は、「女性研究者支援相談室」を開設し、この時期特有の課題について相談に乗っていきます。

男女共同参画時代においては、多数の女性研究者の誕生が俟たれています。本学ではこの流れを促進するべく、女性研究者のキャリア確立をサポートする方策がすでに展開され始めました。近未来の東大キャンパスでは、多くの女性研究者が活躍していることでしょう。

二人の専任教員と、さらに専任事務職員を得て本学本部棟(本郷キャンパス)9階に「男女共同参画オフィス」を新設しました。支援プランでは、学内保育施設(本郷・駒場・柏・白金の4キャンパスに予定)の整備、学内外の女性研究者等のデータベース構築・東京大学女性研究者白書(仮称)の発行等を行います。来年は、世界の女性研究者を招き、講演会も予定しています。

男女共同参画室の活動がもたらすもの

女性も男性も働き易い、自己実現できる社会づくりです。キーワードは、「多様性」と「ワークライフ・バランス」。東京大学が、世界のトップクラスの大学であるためには、男女共同参画が必要不可欠ですが、その戦略を立案・推進していくのが、室の使命だと考えています。





五十嵐 隆
大学院医学系研究科
教授

東大病院 「いちょう保育園」の開園

附属病院で働く女性の子育て支援の一環として、本年4月1日より東大病院「いちょう保育園」が開設されました。附属病院の教職員の生後9週から小学校就学前の子どもを対象として

います。定員は0歳児9名、1～2歳児12名、3歳以上11名です。保育日は月～金曜日、開園時間は7～20時で、子育てをする病院教職員の勤務に便利な時間帯になっています。保育園の建物は平屋建てで、延べ床面積は430㎡です。2歳以上の子どもと0歳、1歳の子どもが別々に保育できるように、3つの保育室があります。8月現在、0歳児6名、1～2歳児10名、3歳以上8名の入園があり、7名

の保育士が担当しています。秋には1歳児を中心とする8名程度の入所が予定されています。夏に流行する手足口病などの感染症にかかる子どもが今年は少なく、ほとんどの子どもがお休みすることなく通っています。同保育園が附属病院における男女共同参画の大きな助けになっており、これからもその役割が増すと思われます。



いちょう保育園開園時の様子



窪川かおる
海洋研究所 教授

海洋研究所の 女子中高生向け 「白鳳丸」見学会

文部科学省「女子中高生理系進路選択支援事業」による「海が好き！オーシャンサイエンスで活躍する女性研究者たち」の一環として、本年3月27日・28日に海洋研究開発機構の協力のもと、晴海埠頭停泊中の学術研

究船「白鳳丸」見学会を実施した。女子中高生をおもな参加者とし、講義と船内ツアー、さらに甲板で実際に採水やプランクトン採集をし、実験室で分析・観察を行なった。昼食時は全員が船内食堂に会し、楽しく交流した。事業では見学会に先立ち、5都府県の高校で女性研究者・大学院生による出張授業を行った。この授業と見学会の目的は、女子中高生に海洋科学の知識と体験を持ってもらい、女性もフィールド科学に進学できることを直接伝えることにある。出張授

業及び見学会での質疑応答やアンケート結果では、この事業が海洋科学の知識の普及活動を促進し、次代の海洋科学を担う女子高校生の人材の掘り起こしの一助になった様子がうかがえた。また、この事業は男女合わせて多くの教職員、ポスドク、大学院生等が関わり、協力し合い、男女共同参画の視点からも意義深い取り組みであった。今後も本事業を継続し、女性が理系を目指す環境づくりにさらに貢献していきたい。



白鳳丸 4,000 トンに乗船する参加者



甲板上で直径3mの大型ネット（右側）の説明を聞く参加者



横山広美
大学院理学系
研究科 准教授

10年後の未来と出会う 「女子高生のための サイエンスカフェ本郷」

「ディズニーランドよりも楽しかった！」という感想は、女子高生にとって最高の賛辞であろう。

理学系研究科は「高生のためのサイエンスカフェ本郷」を年2回の予定で開催している。このイベントは大学院生や若手研究員のディスカッションから

理学の魅力をよりダイレクトに感じてもらうことを目的に、本年2月からスタートした。

特に6月17日に開催した第2回目では、女子高生に理学系の魅力を訴えると同時に、女子生徒に特有の理系進学への不安を解消してほしいという教員の強い思いから、女子高生に限定したサイエンスカフェ本郷を開催し、55人の女子高生が参加した。冒頭の言葉はその時の感想である。

女子高生たちは、第一線で活躍する大学院生との交流に感銘を受け、理系進学に対する漠然とした不安を解消したようで

ある。10年後の自分に重ねることができるとなるモデルケースとなる院生たちとの交流は、女子高生に大きなインパクトを与えたと感じている。

学問の多様性は、多様な人がいてこそ実現する。この理念のもと、理学系研究科は今後も女子高生へのアピールを続けていきたいと考えている。



サイエンスカフェで談笑する女子高生たち

多様化 未来へ
バリアフリー支援室

「心のバリアフリー」の 実現をめざして



平尾公彦

副学長
バリアフリー支援室長

東京大学では、大学を構成する様々な人々が活動しています。教員や事務職員、技術職員、大学病院には医師や看護師がいます。それぞれ教育研究活動、医療活動に従事しています。また、東京大学は多様な人材を学生、大学院生、あるいは留学生として受け入れ、世に送り出してきました。この多様性こそが東京大学の強みでもあります。当然のことながら、障害をもつ学生を受け入れ、障害をもつ人を雇用しなければなりません。小宮山総長の強いリーダーシップのもと、本学は世界の知の頂点を目指しています。研究教育面で世界のトップクラスを目指すのであれば、そこに集う人々は精神的にもたくましく、キャンパスは可能な限り全ての人々にやさしいものでなければなりません。障害をもつ人と共に学び、働く環境を実現することが理想です。

本学には、平成16年にバリアフリー支援室が設置され、障害をもつ人のためにさまざまな活動を展開してきました。障害をもつ職員を含め、専門知識を有するスタッフが常駐し、障害をもつ学生の相談窓口ともなり、指導する担当教員へのアドバイスや情報提供を行っています。バリアフリーに関する全学的な理解や積極的な取り組みや啓発活動も進めています。支援室のスタッフらの献身的な活動に支えられて本学のバリアフリー化は少しずつ、しかし着実に進展しています。本学は法人化以降、障害者に雇用の門戸を開くことを義務付けられています。知

る障害者のメンバーによる環境整備チーム、聴覚障害者のメンバーによる自転車整理スタッフ、視覚障害者のメンバーによるヘルスキーパーなど、本学独自の新たな雇用を生み出してきました。しかし、障害者雇用促進法で定められた雇用率は、現在、未達成です。雇用率の達成は最重要課題の1つです。

建物や施設のバリアフリー化もここ何年かで大いに改善されました。歴史的な建物でもバリアフリー化は進んでいます。キャンパスのバリアフリー化が一目でわかるバリアフリー・マップも早急に作成する必要があります。

キャンパスのバリアフリー化とともに進めなくてはならないのは、大学を構成する人々の心の「バリアフリー化」だろうと思います。心の「バリア」とは知識不足や誤解、偏見、あるいは経験不足などが原因で、障害をもつ人と対等につき合えないことです。「知らないこと、知ろうとしないこと、理解しようとしないうこと」もバリアでしょう。心の「バリアフリー」とはこのような心の「バリア」を解消することです。学生には多様な人々と出会い、できるだけ大学に長くいて大学のもつさまざまな顔に接してほしいと願っています。知性と共に感性をみがいてほしいものです。世の中は評価ばかりですが、一人の人間の秘めている底知れぬ可能性を、たった一つのパラメータ、またはわずかな「ものさし」で評価することは決してできるものではありません。この思いは人生での経験を重ねるほど強まるばかりです。心の「バリアフリー」は人を評価する「ものさし」の多様化につながることでしょう。

本学ではバリアフリー支援室が中心となって、合理的配慮に基づくバリアフリー支援を進めています。物心両面での支援が求められるバリアフリーの現場では、全学的な「心のバリアフリー」をめざして、大学多様化への道が切り拓かれていこうとしています。

本学には、障害者問題やバリアフリーを専門としている研究者がいます。教育研究機関としての独自性と特殊性を生かす形で、今後も東京大学ならではのバリアフリー化を推進したいと考えています。近い将来、バリアフリーの面でも世界の大学のモデルとなることを目指しています。



聴覚障害者メンバーによる施設部自転車整理スタッフ。本郷キャンパス内の自転車を整理してくれている



本年度入学式では耳が聞こえず目が見えない福島智准教授（先端研）が祝辞を述べ手話通訳が行われた



バリアフリー支援室でのひとコマ。障害の有無にかかわらず、多くの学生がここに集まってくる



快適化 未来へ 学生支援センター構想

「学び」のアメニティを 作り出すために



浅島 誠
理事・副学長

「人間教育」と学生の社会性の向上という視点から、学生サービス・学生相談・キャリアサポート等学生支援体制の抜本的強化（学生支援センター構想）、それに対応する事務体制の整備・再配置など、現在、いくつかの構想を進めています。

今の本郷キャンパスにおける学生サービス・学生相談機能は、御殿下記念館や安田講堂北側1・2階などに分散され、集中的に学生サービスを受けることができにくい現状があることから、学生や教職員からも不備が指摘されています。

そのために、専門相談諸機関が連携して多面的に学生支援にあたる体制を構築するとともに、本郷キャンパス中央（安田講堂周辺）の地域に学生支援・相談の機能の集中化が図れるよう①学生サービス窓口の集中化②学生相談スペースの拡充③学生相談窓口の連携④学生談話ロビー・交流スペースの拡充、そして⑤

学生の様々な相談や問題に対して迅速かつ適切な対応ができるように「なんでも



相談窓口」の設置といった改善策を検討しています。

その具体案としては

【御殿下記念館の改修】

- ①学生サービス機能の充実や体育施設の管理等を集中的に行う組織を置く
- ②学生の生活に直接関係する授業料免除、奨学金、宿舎等の学生支援を目的とした組織を配置し、さらにバリアフリー支援室を置く
- ③本郷地区の学生にとって交流スペースが少ないこと等を考慮した、学生談話ロビー、学生のための多目的室等、学生サービスの機器等を配置する

【安田講堂内の改修】

- ①「なんでも相談窓口」を設置する
- ②落ち着いた雰囲気の中で相談に乗ってほしい学生等のための相談施設である学生相談所、ハラスメント相談所、キャリアサポート相談室等の充実を図る

より効果的な高等教育を実現するためには、メンタルケアやキャリアサポートなど多角的な学生サービスをも含めた「キャンパス環境の充実」がキーポイントとなります。現在、本学ではそれらのサービスを集約化し、より充実させていこうという動きがあります。未来の大学像はこんなところにも示唆されています。

などの項目が挙がっています。

今後、現在、第2本部棟にあって、安田講堂周辺地域とはかなり離れている留学生関係の相談・支援窓口についても対応していきたいと考えています。

キャンパスを学術の香り漂う空間に——知のプロムナード

本学では、創立130周年記念事業の一環として「知のプロムナード」の整備を始めました。これは、本学の歴史や研究成果を活用した「ストーリー性を持つ散歩道」を本郷、駒場、柏、白金の各地区キャンパスに作り上げようというプロジェクトです。

すでに、「最新の海底地震計」、「日本初の人工衛星『おすみ』の模型（1/2モデル）」など、本学の研究成果がプロムナード各所に配置される予定となっており、さらに、かつては警備の番人が詰めていた「番所（赤門の左右脇）」などもプロムナードのポイントとして公開される予定となっています。また、先頃、「知のプロムナード」第一弾として、赤門とコミュニケーションセンターの間に小柴昌俊特別荣誉教授ゆかりの「光電子増倍管」が展示されました。（写真）

このプロジェクトによって、本学の構内には「学生・教職員の語らいの空間」あるいは「思索に適した静謐の空間」が現れ、キャンパス環境の快適性は格段に向上することでしょう。



光電子増倍管。目には見えない弱い光をとらえることのできる超高感度光センサー

130周年記念イベント一覧

詳しい情報は「創立130周年記念事業HP」で。
<http://www.130out.pr.u-tokyo.ac.jp/index.html>

現在行なわれている130周年記念事業&これから行なわれる130周年記念事業

東大農学部歴史 農学生命科学研究科	平成18年12月～	朝日新聞社共催「知の拠点サミット」 本部企画	平成19年11月17日
福武ホール工事壁「考える森 ThinkingForest」プロジェクト 情報学環	平成19年6月4日～ 工事終了まで	医工連携の新たな発展 (第三回疾患生命工学センターシンポジウム) 医学系研究科	平成19年11月中旬
学生企画コンテスト 本部企画	平成19年9月～12月	国際シンポジウム「食の安全確保のための疫学研究と科学的リスク評価」 農学生命科学研究科	平成19年11月19日～20日
『異星の踏査—「アポロ」から「はやぶさ」へ』展 総合研究博物館	平成19年10月～12月26日	東大農場収穫祭 農学生命科学研究科	平成19年11月23日
展示「ユビキタスコンピューティング技術と博物館」展 総合研究博物館	平成19年10月～12月	物性研究所創立50周年記念事業 物性研究所	平成19年11月29日～30日
東京大学駒場博物館/2007年秋季特別展:「Musica ex Machina—機械じかけの音楽—」 総合文化研究科	平成19年10月20日～12月2日	公開講座「異星の踏査—「アポロ」から「はやぶさ」へ—」 総合研究博物館	平成19年11月7日～12月5日
比較芸術フォーラム= ワークショップ「音楽機械のための作曲」&コンサート「機械音楽の動向」 総合文化研究科	平成19年10月～12月	国際シンポジウム「森林と地球の未来 (仮題)」 農学生命科学研究科	平成19年11月頃
コンテンツ創造学科産学連携教育プログラム企画展:写真展「本郷零時3分」 情報学環	平成19年10月22日～11月8日	東大農場公開セミナー「食をめぐる問題 第4回」 農学生命科学研究科	平成19年11月頃
(第33回) 東京大学農学部公開セミナー 農学生命科学研究科	平成19年11月3日	貴重図書特別展示 附属図書館	平成19年11月1日～14日
東京大学シンポジウム「アジアと語る希望・幸福」(武田ホール、弥生講堂) 本部企画	平成19年11月3日～4日	学生国際交流サミット 本部企画	平成19年秋頃
日中学長会議 (ホテルニューオータニ) 本部企画	平成19年11月7日～9日	生産・環境生物学専攻公開セミナー「生産・環境生物学の現状と課題 (仮題)」 農学生命科学研究科	平成19年秋頃
東京大学第3回プレジデント・カウンシル 本部企画	平成19年11月8日～9日	国際シンポジウム「機械と音楽」 総合文化研究科	平成19年12月1日、2日
東京大学創立130周年記念式典 本部企画	平成19年11月10日	東京大学シンポジウム「環境生命科学における微生物・植物バイオテクノロジーの最先端」 生物生産工学研究センター	平成19年12月5日、6日
展示、講演会、見学会 史料編纂所	平成19年11月10日	IR3S New Delhi Research Unit @TERI kick off Meeting 本部研究機構等支援グループ	平成19年12月5日、6日
東洋文化研究所公開講座「アジアを知れば世界が見える—アジア界」 東洋文化研究所	平成19年11月10日	クリスマスコンサート 総合文化研究科	平成19年12月中
(第2回) 東京大学教養学部選抜学生コンサート 総合文化研究科	平成19年11月10日	東京大学ソウル大学対校記念スポーツ大会 (剣道) 本部・東京大学運動会	平成19年12月下旬
工学系研究科フェロー称号授与式 (工学部8号館) 工学系研究科	平成19年11月10日	世界のスーパー女性研究者シンポジウム 本部企画 (男女共同参画室)	平成20年2月～3月
東アジア四大学フォーラム—共通文化の創造をめざして 本部・総合文化研究科	平成19年11月11日～12日	シンポジウム—ヒトと動物の感染症研究における疫学的アプローチ 農学生命科学研究科	平成20年2月
GUPHA (Global University Program in Healthcare Architecture) Forum 2007 (ヘルスケア建築におけるグローバルな大学間プログラムフォーラム2007) 工学系研究科	平成19年11月12日～14日	(第3回) 東京大学教養学部選抜学生コンサート 総合文化研究科	平成20年3月中
先端機能材料デバイスラボラトリーズ オープンフォーラム 2007 工学系研究科	平成19年11月16日	特別展示「鳥のピオソフィア—山階コレクションへの誘い」(仮称)展 総合研究博物館	平成20年3月末～5月末

すでに行なわれた130周年記念事業

- 東京大学創立130周年記念事業開始宣言
- 総合研究博物館特別展示「東京大学コレクション—写真家上田義彦のマネリスム博物館」展 ●東京大学インド・フォーラム
- 東京大学第1回プレジデント・カウンシル ●社会科学研究所「世界における社会科学的日本研究の現状と展望」 ●朝日新聞社共催「知の拠点サミット」 ●東洋文化研究所公開講座「アジアを知れば世界が見える—アジアの歴史」 ●「知の構造化」ワークショップ ●サンマイクロシステムズ スコット・マクニリー—会長講演会 ●サンゴ再生技術による地球温暖化防止ならびに生物多様性の保護についての専門家会議 ●東洋文化研究所(第2回) アジア古籍保全講演会 ●社会科学研究所創立60周年記念講演会 ●サステイナビリティ学連携研究機構(IR3S) 国際研究型大学連合(IARU) 公開シンポジウム—資源と環境を支える地球と人類の未来— ●国際シンポジウム「火山噴火罹災地の文化・自然環境復元—アウグストゥスの別荘?または神域?—」 ●シンポジウム「知の構造化と図書館・博物館、美術館、文書館—連携果たす大学の役割」 ●食の安全研究センター設立記念国際シンポジウム「食の安全を担う科学研究の新たな展開」 ●東京大学運動会ヨット部世界選手権出場 ●東京大学臨床展開研修シンポジウム—ベンチからベッド床展— ●そして社会へ ●卒業設計合同公開講座:東工大×武大×東大 ●(第12回) トップフォーラム ●(第1回) 東京大学教養学部選抜学生コンサート ●囲碁講演会「囲碁の魅力—囲碁で養う考える力」 ●アグリバイオインフォマティクス・

- シンポジウム—バイオインフォマティクスを利用した農学生命科学研究の新たな展開— ●東京大学駒場博物館/自然科学博物館所蔵品展「測る人・描く人」 ●東京大学駒場博物館/美術博物館 創造の広場(ピアッツァ) イタリア ●公衆衛生国際シンポジウム2007 ●海外先進教育実践支援プログラム:国際シンポジウム「国際標準の学部初年次教育実現に向けて—教員と職員の新しい連携の形—」 ●FRESH START@駒場 ●東大農場公開シンポジウム「ストレス条件下における農業生態系の管理と持続的農業」 ●東京大学公開講座「グローバルイノベーション」 ●新入生歓迎特別講演会 ●生命科学教育支援ネットワーク:(第4回) 東京大学の生命科学シンポジウム ●東洋文化研究所特別公開セミナー ●イタリア共和国ロマーノ・プロディ首相講演会「イタリアと日本—両国の魅力、そして共通課題への挑戦—」 ●東京大学第2回プレジデント・カウンシル(ロンドン) ●大江健三郎氏講演会「知識人になるために」 ●シンポジウム「21世紀ヒューマン・セキュリティの確立を目指して」 ●東京大学の英語教育:改革の道程と今後の展望 ●特別展示「遣唐と女神—メソポタミア原始農村の黎明」展 ●展示「超高度アーカイブプロジェクト新規収蔵建築標準資料コレクション」展 ●日本関係清代檔案をめぐる国際研究集会 ●シンポジウム「イネのバイオエタノール化による持続的社会的構築」 ●駒場IIリサーチキャンパス キャンパス公開2007 ●国際イオゲンテュイン・ワークショップ—規則遵守のパラドックスをめぐる— ●堀場国際会議「数論機

- 何学におけるp進的側面」(玉原国際セミナーハウス) ●公開講座「植物・動物・社会—西アジア考古学からみたドメスティケーションの始まり」 ●(第32回) 東京大学農学部公開セミナー「農学を創った人、農学が創ったもの」 ●APRU/AEARUリサーチ・シンポジウム「地震・津波・火山噴火とその災害の諸相の多様性」 ●知の構造化センター設立記念ワークショップ—東大が知を再構成する— ●UTフォーラム2007 イン・ソウル ●国際学生フォーラム2007 ●東京大学教養学部ピアノ演奏会 ●史料編纂所附属画像解析センター開設10周年記念研究集会 ●国際シンポジウム International Symposium on Advanced and Integrative Life Sciences ●イェール大学サマーセッション歓迎会 ●堀場国際会議「ユビキタスマディア:アジアからのパラダイム創成」 ●花連—歴史と夢— ●堀場国際会議「独創的研究の神髄をコーンバーク親子から学ぶ」 ●東京大学ソウル大学対校記念スポーツ大会(野球) ●社会科学を語る夏のワークショップ ●FSフォーラム「宇宙太陽発電システムシンポジウム」 ●文の京・大いなる学びシリーズ「第1回 ひとの顔/まちの顔」 ●イェール大学サマーセッション送別会 ●乗鞍サマースクール50周年(SS-50) 記念会 ●中国物権法シンポジウム ●公開講座「130th Anniversary Summer School 東大の森へ行く」 ●東京大学経済学部とリーマンブラザー証券による「金融のグローバル化」に関するパネル・ディスカッション ●東京大学 IBM Day ●生命科学ネットワーク・シンポジウム2007 ●国際

- 交流スポーツ大会文化交流プログラム ●東大農場公開セミナー「食をめぐる問題 第3回」 ●東京大学公開講座「カ(チカラ)」 ●記念レガッタ ●「東京大学アントレプレナーブラザ」開業記念式典 ●第3回東京大学教養学部ピアノ演奏会 ●人工物工学研究センター:国際コロキウム「デザイン科学—創ることと分ることの本質を探る—」 ●総合文化研究所附属アメリカ太平洋地域研究センター創立40周年記念:公開シンポジウムと国際研究セミナー「反米:その歴史と構想」 ●「法学部130年」シンポジウム ●特別公開シンポジウム「生き物文化史に関する講演」 ●学生企画コンテスト(第27回) 日本分子腫瘍マーカー研究会 ●読売新聞社共催「企業ナビフォーラム」 ●第2回ETH国際コロキウム ●(財) 応用微生物学研究奨励会設立50周年記念国際シンポジウム ●シンポジウム「食料とエネルギーに関する水問題」 ●展示「ユビキタスコンピューティング技術と博物館」展 ●IR3S 国際シンポジウム2007「アジアの循環型社会の形成を目指して」 ●東京大学ソウル大学対校記念スポーツ大会(ハンドボール) ●AEARUワークショップ ●JR東日本安全安心工学総括寄附講座シンポジウム「安心安全社会に何が必要か?」 ●哲学会研究発表大会 ●第31回東京大学伊豆・戸田マラソン大会 ●駒場博物館/自然科学博物館2007年夏休み企画特別展「はじめて出会う 開闢の世界」

